和朝

今昔物語

巻之九

世俗部

今昔物語 倭部 九目録

○世俗傳

一 迦衛舍人諸稲荷社茨田重方値女語
二 貞道季武公時紫野見物語
三 曽祢好忠推茶子日遊語
四 尾張國司五節語
五 越前守為盛饗六衛官人語

大曜文庫

今昔物語 倭部九

○世俗傳

一 近衛舎人諸稲荷茨田重方値女語

今いまむかし。二月のけごろ。年比日ひ。京中の災賤稲荷
ゆうぜんとしてあるまうでをなり。ある年近衛官舎人
ごとと云ふ。宇減○乃至付。下野公助。茨田重方奏武負。
茨田為国。源部公友。ともに。餌袋被子酒ども。ひさ
けとて。ちうぐうふ。中乃清。壮ちうれいあるもあく
いまくに美女ゆきあひいう。濃上ぞめ。紅梅萌黄
なとぬうて。ぞめあうぜ。ぜんあうぜ。ぜんあうぜ。

女はりふ立てれる紙。舎人どもわらきてこれい
ひろまて。女が新をうんとこに。雑中重方いりてうつろ
くもたるありて。妻もはるのよいれ新さみうる紙ちう
げるようとぷつうてをしけるぶ。女ら貝をはまて。
立てぶゆうちくちくちくちゆやうみ相うてこ姫女ちうえ
ちうい妻ちうちひうてんんいぷさうのうちつ年み。
のうはうん事。きうんこれをれくけまてこいつをきいう
て愛敬づきうう。重方がいてくぷの君くぷ様ぶこを。
職妻ちうていはきどもちうや新い様くれくたい販婦
てれ様ちうわれいぶ去うんとわるんぶ。続わるんうたが

あうれいぶ。みみつうをうんんんよわうをを。をれりひさ
うんとれりいてぷくきこゆうちうといんいぶ。女ら様い様
ちうぷそつれうて向いぶ。重方此年祢社の神もきうちを。
年来けるりをちらくぷくをうちうれくよ。神のう様
りうちうれて様ぶくいみくくう様くこれを。清ちあい寡よ
てれをうちういぶくみゆうまんいつよ。女ろんづうい。
男もなくて。相をのをうんんもうを様きいべ。宮仕をどう
ちんとちいをぶうぷ。ゆうをてるて様れいぶ。舟のゆく
すを紙れうんがうちうよぷ様沙様れを様ゆうではるちう。
まうてみれりひるいるいぶ。有どうををぷちうをきうん

とくへ。重方大りよろこびて。紙をとりて額をあて。女の
胸のもとに烏帽子を敷けて。清和の御門のまへに
うゐかうぶりさきまうしたりけるに。
宿りいみ足をぬきいだしてとらんぐうんぐして。金じゐ
うぢ。女重方がめぐりの紙。烏帽子ごしにひさしをして。
こぶしをもつて頬のあたりをぢぶりとひきなでふるまて
うつ。重方ゆゑをうしなひて。何しまつりそこ仰をして女が新を
ぬきまこべ。我妻なり。重方和清おいの物よりうるはしくこべ。
女服をうばとりて。己いはくそこくぐうろうろうたるいをい
るぐ同僚らのぢひぐあうさまあうと。笑ひ

わらでもたれかいあうどつまこに服をうばとりてつかる
あうと位をざりはるぶ人れうるまひをうれば。服をと
を出るふこをあうまぢ。今日よりわが作はまうるべ。
さぐ今ちうひぐぐぢ清社の清詞とのうるとうん。
とくく紙借しはる女のまふゆくぐまづはぐうち
かうさて。はまの人ぐうんをそ。ぢういさんとのぐ紙重方
迷惑して物ちかくうひそ。ぐんうもなうおうるとまり
ひうふゆうてうぐぐぢ紙をうてまぐうれぐ。受入ぐ。
吳金ぐうぐもいぢるとおうてぐて上の巻みのぐうとう。
田府はいおくれうるかういてぢううれぐ。女と

いろとろみくゑてう。舍人どもれい何とうぞと。寄て
ゐれば妻にうち絶て立居ふうのうれ舍人どもよく
ちゝあつうまべいたを。ひごろいとまこやわけどれ。
女うくいとれて。髪とくれちされば。重方わもくゆて。
烏帽子のちゞみくうれしうて上りうくゆとね。
女い已病みくるべいちや見うちわてんこの紙。の
ぢうて立帰ゝう。重方家ゝ帰来くいろくにすべ
くれば。妻服居くぎう。重方がいとくさうあくを已は
いふうてのくうけくさ體ぬまひくゆと問。妻答
ゑう。白病者ゆ。前のゆうれ人りうくうとゆとくゑ。

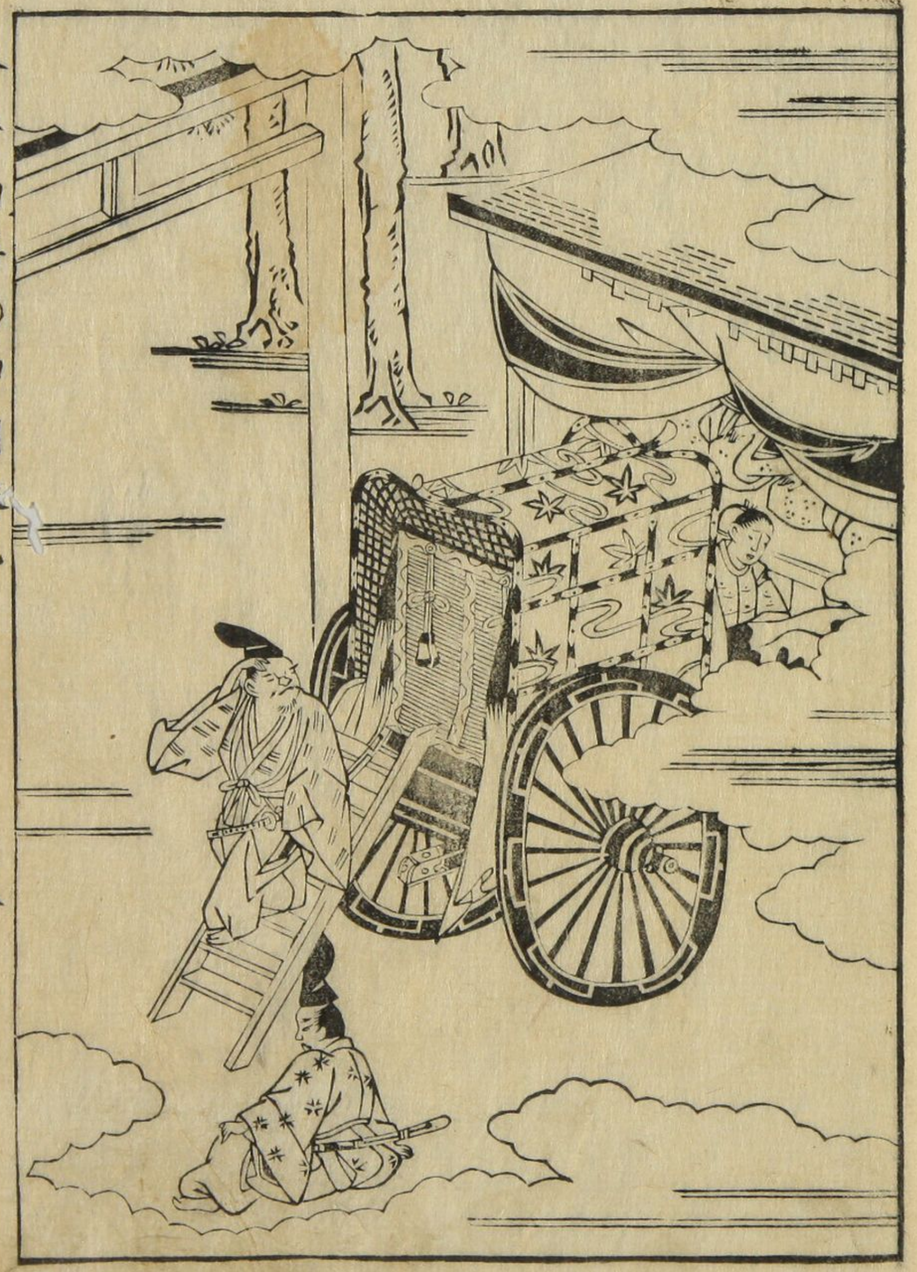
鳴神れうまいてのきうあくれくれ
くれど多いるうのうけゆるゆ世くゆえてりくさ君達
などりくいくれば。ゆ君をれ逢れゆるところをべゆげく
きなんまりれのりけくゑうちり

二　貞道季武公時蛇の見物語

今いむくり。按律守源頼之朝臣滿仲男乃郎業平
貞道村岡五郎既見千前平季武○公時一書曰綱。公時。定道。季武。四天王乃軍也あり。
一書曰。綱ハ四天王の隨一とあり。一書よ。綱い彩まゆてあるがと
あり。ゆ書くうゆてゆれば公時貞道季武い按くり仕れく。綱い後う
ゆ〜〜と
ゆくくう。ゆいこ人乃名あり。りうゆ。皆ゆる用きくくゆく。
ゆきて。魂ちく。思童あるゆそ。りくゆ何よ法まても。

わらはなる事をうたがひて。車にのりてゆくに。東國にてこ
ゝとよばるゝ所にて。男ども。馬のはなをとゞめて。男共のゆくへをしらぬ
ものもなるをれば。摂津守と是をなげゝんどころ
をもとめて。しろ米よんゝそばをいるる。さてあり
賀茂川の邊の日。けこの人はこゝにあらずして
う。今日は見物いとゞきはるゝ。岩倉へゆん
とゝんどれしうるべしゆゝてからして新をふるさだて行
べきこゝもあらばさらにさいあくこゝまれまいりまゝび。
いとゞはるゝらんといひくるふ。二人がいくよりに事あり。
其大德ゞ事なうるまそ。ゆくべしと二人がいくるに。

はまをあ車に乘て。敦盛ゝあいまりてゞ行んと
とゞめうあると。二人がいくに其後ちゝべ。簾なうまそて
女車のゆうにみをばゝのれたりとゞべと。二人は若
ども。げゝもはしに後よりゝゝんと同ゝて大德ゞの車
のうしろせく。下簾なれたるに。三人乃兵賤俗水干袴
をゝるゝ。後物をゝ車はの内ゝ取いれて。袖も出さ
ゞゝて。ゝあれば。金ゝ目ゝは人ゝあるゝ女車とゝんゝう。
かくて。業平のうゝをゆく行ゝば。二人は去ゝ行ゝ
車に乘る事をけまゝび。車のしゞるゝようあるを
らまてくゝゝいゝ立ゝて頸をあゝ。あるいゝ我ゝら



頻さわがしくもてはやし侍りけるころ
いとてさしぐさしてかくしてけるぶこ人ぐるまとり解
出く端板と物つきらしく烏帽子紙袴にて大きに
なりて牛に逸物をそなへくしゆきぶこ人れ老僧の
くるまさよこをほうとうをかうてぶくくをにふくく
ゆくくをてさけべに同じくやうはぐ車くるまを
はたたかはあるか雑色ぐくこうしをかてあやや此
女車とはいかるる人乃こ家くるぞひくくり東烏乃
ひわひくるかうちう東人れ女ようとせんべ数乗くく
ひ男くをついでくくをいあくうくをかくを

出家の行者なれども。二人乃老ども。道とぶらひ車にゆ
られて。さらわくなり。氣しく紙く目くるみて。万乃
物さらはれしゆるゆうゆうしく頭紙はけたぐく。
屁をもらぎくぐ紙ちぐひる間りしとよく寢入
りり。事なりて。物ども口ひれども。ひるうゆうに寢
入るる老ども。ゆしべ。寢ちびて。ゆうゆ事和し
て車どもをそはくぐ紙よ。漸く目さ免
くり。ちらいわく。寢入くぐ紙いんど。腹立して。祢
くちふくくりぐりゆ。れのくはぐゆ紙るい。我く
合義りのぐみ多勢ゆ事入くるゆ。

貧乏氣なる牛飼童奴牲りり身を用りをて。ゆまま
さりくくて。寄懐ゆしく。ふかさと。車紙とぐきて
はらんは。我ゆぐ命わんや。ぐちびまち。
人ゆゆりんくれる。歩くそうんくついて。ゆくみく
後。二人紙老ぐ。車りわくて車をりくゆりて。
皆早鞋をとられて。馬慣ゆを鼻のすゆでりいれ
扇をりて。歩とゆくくて。松津寺ゆ一条の家ゆ
入りりゆ。りまよりゆくれよるて。車乃ありいれ
寄ぐくゆん。ちりゆいちりくくくくゆ。慮ゆくくれ兵
といくぐ。一度も乗ぐる車ゆ乗くい。辟ゆる

ゆゝしく。弓矢のみちもいかくいてたつべきなんありける。此事を後に事成ぐ。かくりゝとうやうにうを伝へ
ゝるなり

三　薯根好忠推系子日遊詰

今はむかし。圓融天皇位を去給ひて後。子の日
ゝ遊遥のあり。船岳くいへ所ゝ出給をのいまるゝ。
堀川より出給せ給ひしく。二条の西へ大宮にまたた
ゆくゝる。物見車ところなく立ならびたり。上達
部殿上人ゝ装束給ひ。車ども及びくさし。院い雲
林院の南の大門のおもてゝ。清馬おりて。芝野の

清馬おりゝれば。松岳の面小松原ゝ生ゝ。
ゝ。遣水をながしけ。石ゝ砂をまきゝ。唐錦の平
張をして。簾をゝ。板敷をうゝへ。高欄をはくゝ。其
いみゝきゝかざりは。めぐりに同じく錦の幕を
ひきゝ。清おちゝ上達部の座ゝ。殿上人
の座ゝ。其ゝ。幕をして。和琴ゝ
の琴を敷ゝ。そこに松ゝ。上達部殿
上人作ゝ。ゝ。和琴候ども。
ゝをれば。皆ゝて作ゝ。
殿ゝ。

守○鳥羽 清原元輔 後五位上肥後守○顯忠男 源雅之 後五位下相模守○兼信男 紀時文 従五位上内蔵助○貫之男 多くの殿上人い渡り院より廻し文をもって奉るべき由仰せられければ皆衣冠し奉るなりけり。ものの音ばかりして弦張の音聞えしのち烏帽子を高く下深の狩衣袴のいみじき紙を着て出でたる人ども何者ぞと見つるに、これは曾根好忠なりけり。殿上人どもいと珍しく思ひ拾芥抄曰曾根好忠先祖不見。寛和頃人任丹波掾。依号曾丹。清浦袋雙子曰。曾丹ハ。丹後掾なり。然ハ曾丹後掾と号に。其後い曾丹後と号に。末よい曾丹と云まんどころ也。此ころ好忠恨て曰。いかゞ。和歌に名高き人なり。い曾丹なりとて。

紙作りにてふものの様に行き。行事は判官代よ。曾丹が系なりとは思ひかけず。殿上人どもも問ひ給へば判官代なりとのみ申しけれども。いかゞ。そこばくの人を。行事の判官代曾丹が居たるしるしとて。何ともなくて居たりけるを。問ひ給へば。曾丹いとく弱くなりぬるなりとぞ。答へける。

何ともなくて居たりけるを。問ひ給へば。曾丹いとく弱くなりぬるなりとぞ。答へける。

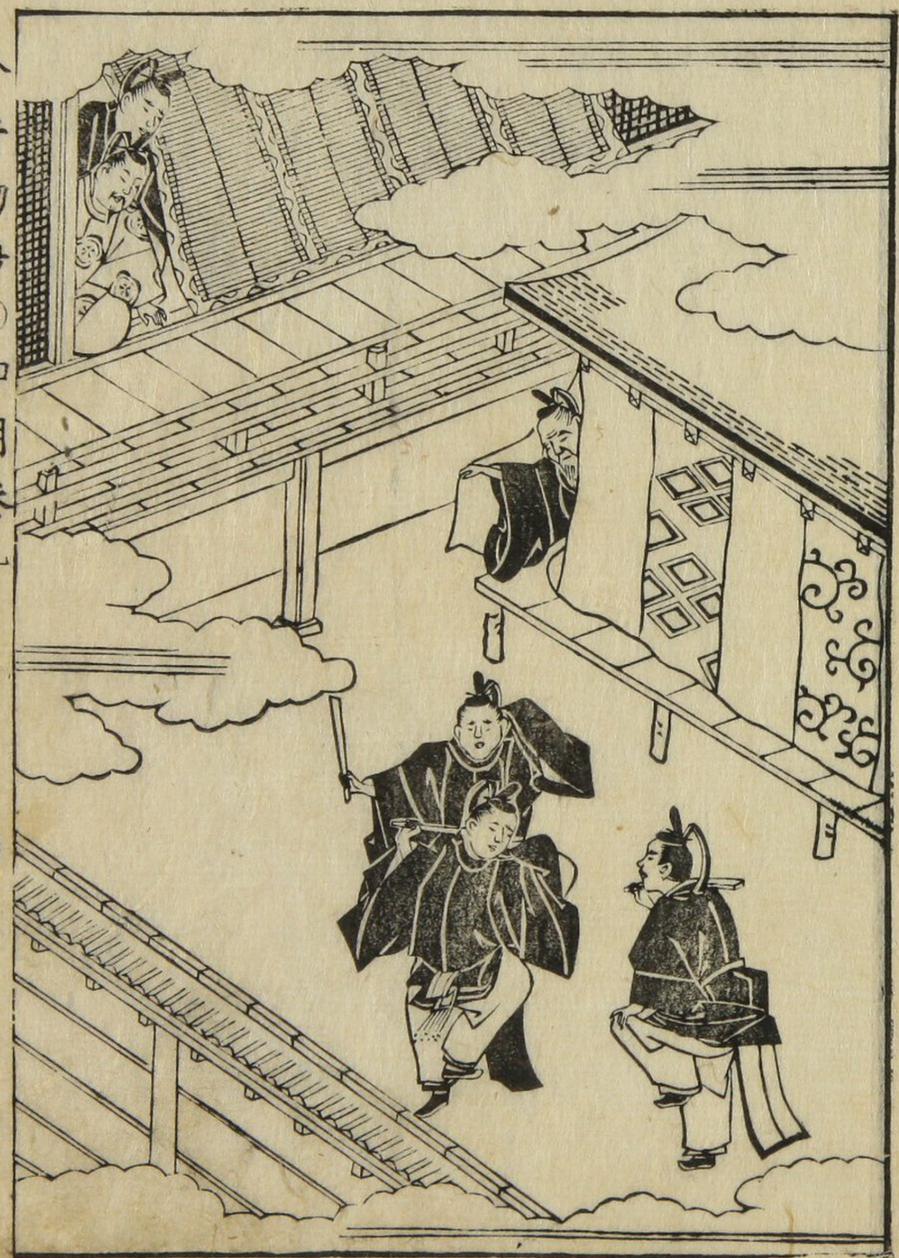
一位摂政太政大臣の師輔公の嫡男　閑院大将内大臣公季公○師輔公末子家公弟　さぶらひ

事と聞えしかちや衣の頸元くくりたるよりそのほゆべき若くいさみたる下臈殿上人どもの冒丹ぐうちよ寄く。幕ぬ下よりさしいれく冒丹が将衣の頸を取て。幕の外へ引出しけるを。若き舟わたさあぐるとておげはずしたれば。若き随身小舎人童どもうしろよりて。ぬぎたるくくりしいあくとなんぬくりはずしたる人なりけり

四　尾張国司五節諸

といみちぬぐ舊受領して。宿りもとめてぬぐ

うち出あひしぬ。幸ひして。尾張守ぬきたるうばどもらびて。任国へくだり給ふ。茶の国司。迎へもあらでて。田民ばかりうつて田畠はたくることもなければ。ひとりぬ。所のわきまへもあるまじきれば。ちからをはたらてよく物さわがしければ。国人よろこびてさいみもつさくりぬ。ものとりもとれば隣国の土民まで来つて。無しいとれば国畠ゆれてはくりそれば。二年が間に国富民ゆたかにして。天皇これをきこしめして。尾張の国の前司みこるとうるおれく。宣下あれこれきこしめしはるふ。任二年の内ぬよりた国



ちゑとる事。奇特かりとぞ作りしが。人これをぞ感じ奉る。かくて三年とつよ。五節を家〻に献ず。尾張いまわたり織る糸綿なれども。ところてよりぐ〻しくとりくしたんや守るやうに物はよりあはしが。物の色どり折目針目糸目いと安く調へ奉る。五節の日。常寧殿の戌亥の隅をぞ立てうきを。鬢の色几帳の帷。折おしてる女房はかぐ〻つみ〻く縫うて祈く。是こそ色いろ〻ゆるこゝろし。何とはなきてもいしうてる物の上ひろれと。皆人こゝをかめ奉る。結構かぎりなし。他の五節よりいと

ばかりまいり殿上人郎人まで。此立節面乃色にて。立ちて氣色ばみゐる。此立節面乃門は。守妻子親新ども。屏風のうしろに集居たりけり。ゆゑよりいとうるはしき人乃流れたりけり。いとあるまじきわろん守が親より。未郎人みなあるべき殿ともゆるされざりけるいと。門色のうちとびぱらえくもきりどいつくみ乃人居たるはなりもとれいと。子どもと病きてざりろも。志うれし殿乃立ちて遣ちて。宮くの女官ども乃唐衣裾裾ばかりくゆき。殿上人郎人乃出掛をし。織物の指衆をとばさ。海ぐに燒ぞられて通る紙。簾のうしろに

かさりて見ゐる。殿上人ちらくよれいと屏風のうしろに。ものゆ紙を。後乃者もはまづさてまろびいつくとなる。しろる間ぱりさ殿上人宿直所ふよりあいあ。此尾張乃立節所い。物のいろまでいみくく他たちぐれ。さりぞ。此守が一家内色のうちをさてとしも。き称い。我名ぶちくよ科いぱかくまさいぐちるいざ。これをとりて。称わぐ。ゆよいさんといよわる殿上人。乃の物ぐ中ういぐきんと問いぱりの立節所より紙。得ぬとてぱぐべきあるいぱ立節面乃紙殿上人

きいてく多くてぞ。ちゝ和ら多人。殿と人。きこしめす。五節所の
多んとそ。げろうまは。はな。紙をとりく。襲の表衣。紙ぬ
ぎ。ぐしてぞ。五節所乃。あよ。ぞ。び。紙をたくさん。
うさりんとするちゝ。そのはくりゝ。紙は。鬢をら
いをつゝせべこと。れ。ぞ。ぞ。ぞ

いそ。何の罪あれば我をかかるこうこうん尾張
国代とれば国司ろうぶ。天皇我を国司なり給
ひしうばいぶらばさんとぞ思ひしらるるぞ。ふうたよりて我免
ぐしてよ。我ぞ。ちそ。きはうぞ。おきまよわじ。
仏立給まる事いかばかりこのそらあるるりいぶ。天皇の
おしあそれ作れば。そそえぐこそ仏ぞ。まるにたきを
あまぐ。鬢のあたいぶ。あくさうんなるよりして。鬢ぐ。落
うせてうばこそぶぐれ。七十にありあまばれる
しまぐ事あ。ぶまを仏ふてまばぶ。ぶとろうこととべし
いぐぞう帝王のおくう。後と王宮乃内にて。衣裳乃絶

をうくうこうこうこうべたぞよもちろうるあ
ある後ぐ。其おわわるまぐ出まをぐしてぶりあるた
いぶ。おぐぐさんとて虚宮仏いそ仏ろうあぶろ仏ちのあるさ
人いぶりひろうるもちなくぶ。虚宮とるあり。吳人をこを
おぐぐまもて後りんぶそろうもちて後りんぶ。翁いよもちろう
まくぶりいせぐぶ。宮乃内にて。妻殺しぶりぶ。ぶりて
ぶり仏罪ふおろうるこべしぶ。あるいう仏ぶ。君達ゆくいひ
うぶ。系翁のゆうなるうそ脇を殺ぶまぐうぶ。翁ぶう
ていうと拾うぶ。ぶところう。業のぐぐく。未ろう殺ぶ。
南殿乃方ろうぶ。いのくぐうて来る音とぶぐめ乃

素直なるは仏ぞ。胸ばかりにてさてい屋にていなるまゝに
いづくんぞ古紙のうづくまるを。新をふりておもてなしわるる
ぞ。あるれ方より押しもせずして紙をしべ。結 襖表の衣
を尾までうぎて。五節句のかけ入くるいい皆をぬ
さぬるいい寄物しあるいい屋にうづくるいい屋ま
くして同音にて繋がるらの寄りとうとうくおもてなしを
ちゝあるべ殿上人四五人へうて。麓の門は者乃物ばまま
ようへ紙おくるもはれ。事のうるもちゝ巣いつ
なるゆへよ。ゆくゆくはなぶるをおゆくらいうう等
いあくおれ君いれされくゆくまどゆへはうよびろ

やとうとうおくるで海にて紙はあるうまと。
ゆく告ることあるまゝは我事ともちゝびて居る
なるべ。あくれなるうる君の浮ちうれ千年万
年平ふ乃人すへうて。紙おくいのう居うり。け
君を麓の中紙さしのぐけば。寄人やゝ引出さ秋て。
ぬるう腰。物ゝおるうゝ。屋風はしろう。這
ゆく。墨代のあづべ。すれきぬうう。ゑべもちゝ
男族名いはるうさちうて。あげくまあゆくて紙と人
はあ解うて。へうて後。寄人をあゝて。ゆくべ君きや
あるうとはとうふ。一ばいなく序おいうをいうり。

守まれくくたいぶ出くぷふいうい声うて。翁ぶこそ矣
いくあらあ。帝まれ出くあめ。ひ毛穂をいくきるいぷ。
しき事ちうぷけうま造いうれくび事ありべぷよみ
よ已写。天地日月わきくくてしまへ。神代ちこの
うこ。かくるる紙間及ぐだぷ。何とちうゆく世の中ぞ
中ぷ大息つぐて作さ岳くうぷちうのくあうちう五節
百乃人ぐぐぷきてれくやを物ひくるまに関白殿
の御人ぬよまくかくうくる紙ぷくつぐて殿急く
はくえてぷくくうぐうるぷこのころ。ここ人と括
くあうていぷるものの紙うくんくまいくるまん。

五　越前守為盛饗六衛府官人語

今いむ。ぷ。後白河院御時。越前守為盛朝臣。従五位下左近衛
少将。参河守為忠男也。人
あり。越前守たくかるまくれ。左衛門大尉藤原紙
さぐくれば。六衛府の官人下部おいくまぐ。ぷれと
つまくく平張れ具ぐぐ紙おくぷ。為盛朝臣ぐ家り
行ぷ。門のあと平張をうて。其下に朝座をそ
ぷ。あるうぐう岳ぷてく。家の人を出入さをぐて責
岳くう。おくくて六月ぐるまいくぷくく。焼くて日長か
るう。朝より未のいくぐぷまで岳くう。くれぐぷ官人

ども見めてりはきまてぞせんうさなりをくれども物
みちぐらんよりぞ帰んゆくこの舎ぐ居るに家乃
門をたてあけてをのれ大ひらなる土からをもち出て
いとく宇飯のりをて作也ぞく射面せ居かりくれども
事れそうくさあくべぞ女なぐれぐらはをべ
物をなりはるかくあつさぐふさぐあくさ湯咽うを
わんぞ酒一つまを作りんぞだた右近乃官人達
舎人をで入をべ次この府れ官人達い近衛官の人達
乃えをいまん後よりとべ一度ぐくりべくれども不も
せぐはをぐおぐはるあく先近衛官の官人達い

せをくとりはくいくぐ粒別見めてくさくく咽をかくく
れうをれぐいてう徒きぐ作うを系入くかくまをは
事のかりを毎をもりはんと答ん侍をのうを向て
門をひきくれぐ左右近の官人舎人皆入をぞ中門の
北乃廊ぞ長筵を西東向
中に机三十ばり北向ぞ向さぞ間ぐりに敷を
物をこれぐ始くき干鯛始ぐの鮭ぐ始をを
切く盛てり鬢乃始くく鯛乃鬢ぐ紙し置てり菓
るをはよく熟をる李の栗ぐ色ぐをを大なる春日器よ
ぐりぐ置てりを入れくて後ぞ近衛官の官人

きどろこれたるに、おくといふ尾張兼時、下野敦行
等は官人どもに歩もれて入れば、他の府の官人のぞ入
りいて門を閉ぢ強をけて強にとりて入る。官人
どもは中門を堅搭ぢて、疾く入らんとしけれども、
てただ右近の官人ばかりの向搭よりぞ、のらせ出ぬ
ぬやくまをよめいくどもおりてあるわざをぶ官人
ども物ものきゆたいぞ、鞋鞭鞭などにて
ちぢぶぶちぢぶくかりて盃の大きくらどもなりとこう。
杯數ますくく持ちぞ。兼府敦行ぞおよ盃。次ぎ大
偏提ぎ酒を入くまらまぞ。兼府敦行れのく

坏ばかりをあぎて、汁ばかりをあてのむ。酒かめ
つきて破ぬるあれども。日ごとにかさりく咽喉かくるゆゑ。
三度はぎまで呑ぬ。浴くれば舎人共もわびしうば。
二三坏四五坏づつのみくだす。李広さうかみて又四五
六度づつ呑ぬ。ぬくてぬくてぬくてぬくてぬくてぬくて。後守篭ごとに呑くりかへる。
物をかくまでぬくてぬくてぬくてぬくてぬくてぬくて。砂広ぬんといふ
でらのべさぶ四去年旱魃して病なども得ずして
なしぬ。おも得ずしいぬ。ぬんごれさ公事にぬくも
てぬくかくてゆくく残る物をけまべ。家料も絶侍
女ども飢なども。餓死ぬくて砂とぬんばぬくもぬんく

なしぬ。ぬくか見ばまれば面伏とぶにまくをぶ公の程
かくなる法へおまの宿報はるくて。ぬくの家広
を面いで。遠く我国よりてぬくてぬくてぬくて国
をぬくぬくぬく

ゑ札をゑんてまぶくいさんん。まゐよりてはまで
はは服ゆくすあれあてう。ほとこうよ兼府あてうさ後
うはたくけうまうらてゆきをぶおのく巻紙えてけうを
かさあう。板敷とてぶうれあるしい車宿よゆさをう
うづうほう。ゑ地をも解はどなるしい漸く脱しあう。
線の水紙うつとぶくく大後を深くうかくもれぐう
たうしはう事よ。は義ぶあゆきるゆ仕いぐさんあて。
うるうちうしいうもあう。いやく寄いあてとを。
我名ぶかりさに地わくのうゆくうとうつを者。額
をちぐあ服をりくゑくうあさ始うきうる門

をいくきて。次の府乃官人達入ますとうくぶ。各えゑ紙
みく前のくもがく各は酒をのまば。我名ぶゆうみ
なるぶくさいう。袴ども大後よけがきくぶくきくか
さ紙見てまいて逃てきくう。はるゆいう探てよう。
あ豊朝花ぶけうをくるたう。うのゆいかくあうさ日
平張のトにて四府かさをく後咽喉うにてをえが
うにきうびいくく変服よちわくきうの書ぶ紙
着あて味損ぶて破さ酒のふぶくうに。牽牛ゑと
をういくのまをば。衛をぶてあんやをぶ退取さん
よは帰るまぶくれば。はくさ用うをてあげくくをと

けりとなりぬとぞいふ。さて亀山院の御宴に、舞人ども、常に参りきこえ給いて、人々ひらきくつ物をぬいでおかれたるを、あるものとりて、翁にて舞きり。官人、舎人どもよりれを者のもとにゆきてぞ見たりける。物をとりてのちにかへしたまひけりと。長府の人、弟いろうをそしり後懲かくるるや。四司のもふ立府の人おろしてゆくをやとみるうちにぬぎはきえうせにけりとなり

今昔物語九